日本臨床皮膚科医会
北海道ブロック第73･74回研修講演会

学術担当・小泉皮膚科クリニック　小泉（こいずみ）　洋子（ひろこ）

日本臨床皮膚科医会北海道ブロックは令和５年、第73回研修講演会を開催しました。８月５日完全オンラインで開催されました。特別講演とパネルディスカッションで構成されました。特別講演は國分医院網走皮膚科クリニック院長であります川嶋　利瑞北海道ブロック長座長のもと、「掌蹠膿疱症治療の実際」と題し、小樽市立病院皮膚科医療部長保科大地先生がご講演されました。パネルディスカッションは川嶋ブロック長の座長のもと「開業医における掌蹠膿疱症治療」をパネリスト、高木皮膚科診療所院長　高橋　英俊先生、小林皮膚科クリニック院長有田　賢先生、札幌皮膚科クリニック副院長　山口康之先生、保科　大地先生が語りあいました。

保科先生は「掌蹠膿疱症治療の実際」にて、掌蹠膿疱症（PPP）は特徴的な臨床像を呈する皮膚疾患であり、2022年日本皮膚科学会が診療の手引きを示しました。PPPは手掌と足底、あるいは、そのいずれかの部位に新旧の無菌性膿疱を多発する疾患です。膿疱に混じて水疱を同時期にみることがあり、消長を繰り返しながら慢性の経過を辿ります。多くは病巣感染を有します。喫煙者が多い、40～60代の女性に多いです。10～30％に主に胸鎖関節に骨関節症状を伴うことがあり骨内に炎症が波及します。治療アルゴリズムは、１）生活指導、悪化因子の除去、病巣感染の治療、２）皮膚症状に対する治療、３）関節症状に対する治療、です。治療はステロイド外用ビタミンD3外用、紫外線療法、全身療法:エトレチナート、シクロスポリン、グセルクマブ、NSAIDs、MTX等です。IL-23p19阻害薬であるグセルクマブは既存治療で効果不十分なPPP, 中等症状以上のPPP、費用を含めて治療を希望する方、他の治療法で難治でありQOLの低下がある方が適応でしょう。効果はなだらかなピークを示し有効性が示されており、軽快再燃を繰り返します。１回目で紅斑が減った方、効果発現はゆっくりであったが中止しても症状が安定、再投与は問題なく行うことができた症例を示されました。

パネルディスカッションでは、１）バイオ、グセルクマブはどのような患者さんにどのように勧めるか、高橋先生は生活指導でも悪化、治療でコントロールがつかない皮膚関節症状の強い方でしょう。川嶋先生は１年位続けすっかり良くなってやめましょう。その後１年以上落ち着いている例があります。効果が出るのに時間がかかるが長く効果が続きます。バイオを再開した患者もいます。２）禁煙について、高橋先生は前向きな人には呼吸器内科へ紹介して禁煙するように勧めています。禁煙が難しい場合でもバイオは勧めます、バイオを勧めると禁煙に良いです。山口先生は喫煙していてもバイオは結構効いています。３）歯科金属パッチテスト、歯科金属の取り替えはどうか。高橋先生は最近は齲歯、歯根部病変のほうが問題です。歯科との連携を探すのが大事です。有田先生は金属除去の前に根管治療をしているために良くなったという考えがあります。４）バイオを勧める人は乾癬に比べて少ない印象です。乾癬は全身に出ていなくとも前腕下腿だけでもバイオを勧める方もいます。病識に違いがあるのでしょうか。保科先生は、乾癬は山が大きいのでPPPは強いモチベーションにつながらないのでしょうか。最後に川嶋先生は基本に忠実に生活指導治療し、バイオは困っている方QOLに低下がある方、関節症状には積極的に、中断後も効果が続く例もあることも勧める点でしょう。

第74回研修講演会は11月11日、かでる２．７で開催されました。急に冷え込み札幌に初雪の降った日でした。オンラインと会場のハイブリッドで行われました。川嶋ブロック長の座長のもと、札幌医科大学 菅 裕司先生が「成人の食物アレルギー」と題してご講演されました。食物アレルギーは食物によって引き起こされる抗原特異的な免疫反応です。20歳以上の食物アレルギーの第１位は甲殻類、２位は小麦、３位は魚類です。血液検査で陽性かつ食べると出るときは食物の除去。陽性だが食べても出ないのはアレルギーの既往、感作状態、疑陽性が考えられ除去不要です。陰性で食べると出るのは非IgE機序、偽陰性です。血液検査だけでは診断できません。VIEW39検査はオボムコイド以外のコンポーネント測定ができません。全く原因が不明の時は有症時に食事日誌をつける、持参できるものはプリックテスト、食べたいものから負荷試験に進みます。食物負荷試験は原因物質の診断、耐性獲得の判断、リスクアセスメントに行うが、アナフィラキシー症例は専門施設で行います。食物アレルギーにより引き起こされる症状は、皮膚症状、粘膜症状、くしゃみ、目の痒み、消化器症状、腰痛などあります。必要最小限の除去、抗ヒスタミン薬、ステロイド内服、エピペン、吸入薬、家族友人に告知します。菅先生は、食物負荷試験は、成人食物アレルギーの診断をはっきりさせるのが目的です。明確な診断は患者のQOL向上につながります。食物負荷試験にチャレンジ続けます。意気込みを語られました。